

令和7年度学校自己評価システムシート 国際学院中学校高等学校(高等部)

目指す学校像	建学の精神「誠実・研鑽・慈愛・信頼・和睦」を身に付けた人材の育成
--------	----------------------------------

重点目標	1 教育力の向上 2 グローバルネットワーク活動の推進 3 広報募集活動の強化
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校評価実施日とは、学校評価委員会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

学校評価委員	4名
事務局(教職員)	7名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学 校 自 己 評 価						
年 度 目 標				年 度 評 価 (3 月 3 1 日 現 在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度 次年度への課題と改善策
1	①生徒が主体的に取り組める機会を意図的に増やしていくとともに、自らの取り組みを振り返ることができるようにする。そのためには、保護者等との連携が必要である。 ②生徒が安心して学校生活に取り組み、自らの成長を感じることができる教育環境を目指す。また、DXハイスクール認定校として、生徒の取り組みを推進する。 ③昨年度大学進学率は上昇した。難関大学の合格実績の向上とともに進学後の見据えた確かな学習力の育成が求められる。	①主体性の醸成 ②教育環境の整備 ③進路実績の向上	①SEL教育(Social Emotional Learning)の視点を入れた教育活動を実践する。 ①Versatile Saturday(土曜講座:VS)を充実させる。 ②生徒、保護者等への各種アンケートを活用し、教育環境の改善を図る。 ②本校としてのDXハイスクールの取組を計画、実践する。 ③上級学校進学及び進学後を見据えた授業を実践する。 ③進路希望に合わせた進路別のガイダンスを教員、生徒保護者向けに実施する。	①教員、生徒がSEL教育の目標を理解し、主体的に関わることができたか。 ①VSの講座数や参加人数が昨年度と比較し増加したか。 ②アンケートの結果を活用し、教育環境の改善につなげることができたか。 ②DXハイスクールとしての取り組みを実施することができたか。 ③進路実績目標を達成することができたか。	①SEL教育の推進に向け、まずは生徒の非認知能力を推測するサービスを導入した。 ①令和6年度は26講座、受講人数229人(延べ人数)であったが、令和7年度は47講座、受講人数329人(延べ人数)であった。 ②授業アンケート、生活アンケートを定期的実施することで、生徒の動向をいち早く知り、対応することができた。 ②VSでレーザーカッターや3Dプリンタを用いた講座を開設したが、受講希望者は集まらなかった。 ③大学進学率が3.9%であり、国公立大学4名、GMARCH5名などの合格実績を残した。	B ①SEL教育についての理解を促すため、教員向けの研修を実施する必要がある。 ①令和6年度と比べ講座数や受講人数は増えたものの、意義や目的についてさらに認知を広げる必要がある。 ②授業力の向上、生徒の状況の把握のためにも、定期的なアンケートの実施を継続していく。 ②教職員全体でDXハイスクールの取り組みを推進するために、教職員のスキル向上のための定期的なIT研修を計画する。また、購入したレーザーカッターや3Dプリンタなどの機器を多くの教育活動で利用できるように、教職員に対して実技研修を行っていく。 ③生徒がより主体的に進路決定を行うためには保護者の協力が不可欠であり、そのために保護者のみの進学説明会を実施する予定である。
2	①ESDやSDGsへの理解を進化させること、さらにその目標達成に向けて具体的な行動を多くとることができるようにすることが課題である。 ②国際交流や地域交流などをさらに積極的に推し進めていくことが必要である。	①ESD、SDGs達成に向けた教育活動の推進 ②地域との連携や海外交流などの推進	①オーストラリアへの海外研修を実施する。 ①企業との連携活動を積極的に活用する。 ①「総合的な探究の時間」を活用し、ESDやSDGsの教育を実践する。 ②海外の学校と交流する機会を積極的に設ける。 ②伊奈町の地域連携に積極的に参画する。	①事前、事後学習を含め、海外研修の目標を達成することができたか。 ①企業との連携をすることができたか。 ②地域の活動に積極的にかかわることができたか。 ①②海外の学校との交流や海外研修を通じた国際交流の中でESDやSDGsの取組を推進することができたか。	①「積極的に英語でコミュニケーションを図る」「異国の文化に触れ、知見を広げる」「生徒主体の行事にする」という三つを柱として取り組み、当初の目的に沿った十分な成果を得ることができた。 ①ユニバーパ・ジャパンと連携し、ダヴセルフエスティアムプロジェクトの出前授業を行った。2月には株式会社Agoopの人流についての出張授業を行う予定である。 ②直近ではさいたまマラソンのボランティア活動を行うなど、多くの生徒が校外での活動を積極的に行っている。 ①・②中国や台湾との継続的な交流が行うことができる土壌を醸成することができた。	B ①企業と連携することによってユネスコスクールやDXハイスクールとしての責務を果たすことにつながると考えるが、未だに外部人材の活用は不十分であり、関係各所との連携を深める必要がある。 ①ユネスコの定める国際デーを教育活動に位置付ける取り組みが未だにできておらず、改善が必要である。 ②海外学校との交流について、柱となる取組をつくる必要がある。 ②地域連携については、さらに積極的な参加ができるようにしたい。
3	①様々な教育成果を、多角的・多方面に発信していくことを心掛けている。組織的に不断の発信を行うことと、発信の影響を拡大することの2点が課題となる。 ②令和7年度は定員以上の生徒が入学した。引き続き定員充足を目標とし、受験生、保護者、中学校、塾に「選ばれる学校」となるよう、不易と流行の双方を重視した観点を持ち、外部の評価を踏まえ、受験生に寄り添った、多面的な広報募集活動を実施していくことが課題である。	①教育成果の多方面な発信による生徒の自己効力感の向上 ①受験生に発信した情報へのよい反響 ②本校の教育方針に共感する受験者数	①HPとSNS(LINE、Instagram、Facebook)を併用する。その他フィジカルメディア(パンフレット、ポスター等)も駆使して教育成果を発信する。 ①②パブリシティ(メディア活用した広報活動)に注力する。 ②中学校や塾との直接的な情報交換(説明会、相談会、訪問等)を定期的実施する。	①②HP、SNSにて、魅力的なコンテンツを発信できたか。 ①②SNSはフォロワー数などの数値目標が達成できたか。 ①②メディア活用については、本校生徒、受験生、保護者が満足する内容を提供できたか。 ②受験者数は堅調か。 ②入学者数は定員を充足したか。	①進路実績や部活動の活躍などの教育成果はHP・SNSと、校内看板にて発信した。生徒の自己効力感は向上したと考える。 ①記事は、本校生徒組織(生徒会、広報委員会等)で原稿を作成する機会が増加した。 ①②メディア活用は大手番組収録1件、BLEND(連絡ツール)で保護者にも周知を図った。 ②LINEでは、学校説明会等の案内を含め、受験生それぞれのニーズにマッチした情報をタイムリーに発信した。 ②LINEのフォロワー数2482名(目標1500名) ②単願志願者が30名増加した。	B ①SNSでは、Instagramを活性化させたい。魅力的な記事をコンスタントに、タイムリーに発信できるように教職員や生徒組織と連携して取り組みたい。 ①メディア活用については、間断なく依頼はあるものの、学校行事との兼ね合いがつかないものが多い。先方のお話を伺う姿勢は引き続き堅持したい。 ②学校説明会では、生徒の活躍を可視化できる取り組みを増やして、受験生と保護者が、本校生徒を見て本校を選択する、という関係づくりに努めたい。 ②次年度は学校の変革期となるため、中学校や塾の先生方に、教育内容を知っていたら訪問機会を多くしたい。

学 校 評 価	
実施日	令和8年2月12日
評価委員からの意見・要望・評価等	
<ul style="list-style-type: none"> ・時代を捉えながら、課題を設定し、教育活動を展開していっていることは評価できる。 ・AIは教育に取り入れられている。課題はあるが使っていく方向性の中で、どのような利用がよいのか考えていく必要がある。 ・SEL教育は是非すすめていってほしい。またその成果が進路実績とどう関わるか検証していくとよい。 ・学校と保護者等の関りは小中高と上がるにつれて薄れていく。保護者等の力を活用することによって、保護者と学校の関りが増え、よりよい教育活動につながるのではないかと。 ・大学進学を目標とした進路指導ではなく、先を見据えた指導をお願いしたい。 ・早い段階で海外の経験をさせることは重要で、価値のあることである。さらに事前、事後指導を充実させてほしい。 ・日本文化や地域文化など日本らしいものを追求しながら、発信していく必要がある。 ・外部人材の活用について、交流ではなく、協働して取り組むということができると、自然にそれが常態化していき、取り組みの柱になっていくのではないかと。 ・町内でさらに小中校の連携ができるとよい。 ・SNSの活用は非常によくやっている。 ・教職員と生徒が一体となって、部活動の活動などを記憶に残るコンテンツを発信できるという。 ・情報の発信だけでなく、何でと思わせて興味を惹かせる方法もあるのではないかと。 ・大会結果だけでなく、そこに向かむまでのプロセスについても発信していったらどうか。 ・シート全体に言えることだが、指標が具体的な方がよい。 	